

# Akatake Times

ようやく過ごしやすい季節になりましたがひと月後には梅雨となり、じめじめしてしまいますね。梅雨時は低気圧と高気圧が頻繁に入れ替わり天気が崩れやすいことから、頭痛や倦怠感などの体調不良を感じる方が多いと言われています。健康に十分気を付けて、皆さん頑張りましょう。



【2024年2月～3月に生けた花の中から選りすぐりの1点を選出】

### ◆「近隣の変化」

「1,2,3,4」[2,2,3,4]・・・と元気な掛け声とともに準備体操をする小学生の野球部。私の家の東隣に小学校のグラウンドがあり、土日は大概朝から夕方まで白球を追いかけている子供達の姿を見ることができます。20数年前は野球部のほかサッカー部もあり、隔週でグラウンドを使い分けていましたが、人気薄で解散したのか、場所を変えたのか、今そのサッカー部の姿はありません。

また、近隣では賑やかだったお宅が独居老人の単独世帯になっていたり、空き家や売り家になったりと、この数十年で町内の風景も随分様変わりしてきました。

私の組内では、還暦を過ぎた私が30年以上最年少で、町内の一斉清掃では必然的に重たいゴミを運ぶ係になっていましたが、年々体力の衰えとともに負担になってきており、このまま町内会や組内自体が存続できるのか、はたまた限界集落になりはしないか・・・危惧する今日この頃です。

### ◆「未来の人口」

日本が人口減少社会にあることは、誰もが知る事実です。COVID-19のパンデミック、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ侵攻、気候変動による大災害など、多くの国が甚大なダメージを受けていますが、社会経済を不安定にする出来事はたびたび起こり得ます。

ただ、こうした経済上の危機は当初こそ混乱しますが、大概「時間」が解決してくれます。画期的な技術の開発、政府などの支援活用、企業の経営努力などで何とか乗り切れるでしょう。ところが「人口減少」はそう簡単にはいきません。未婚率の上昇や妊娠・出産に対する個人の価値観の変化がもたらした社会構造上の問題であり、政府の失政の結果や災害などの外的要因ではなく、個人を尊重するが故のデリケートな問題だからです。

未来を背負う若者達が価値観を変えることでもない限り、将来に渡って減少は続きます。仮に価値観が変わったとしても、人口増加社会に戻るには何十年も先となり、既に手遅れとも言われています。人口減少が与えるインパクトは絶大で、社会保障制度の維持をはじめ、その影響が計り知れないことは容易に想像できます。

### ◆「すでに起きはじめている」

#### ●生活関連サービス

私達が日常生活を送るために必要なインフラやサービスは、一定の人口規模の上に成り立っています。私の住むところでも、スーパーマーケットの閉店、銀行や町交番の統廃合があったり、サービス産業の撤退が進み、既に身近でも便利な生活から遠ざかりつつあります。それに加え、利用者の減少で市民の足となる公共交通網も先細りになっています。高齢者が、運転免許証を返納したくてもできない・・・と躊躇するのも頷けるところです。買い物難民どころか、必要な社会サービスさえも入手困難となり、悲しいかな、円滑な社会生活から切り離される日も遠くなさそうです。

#### ●地方新聞社

テレビに加えネットメディアの発達で、紙離れが進んでいる。危機的なのは若い世代が新聞を手にする機会が減り、購読者はほぼ県内限定、人口減少スピードの速い県ほどその縮小は急加速。配達網も配達部数が減れば、過疎地では輸送も困難になってくるのでは。

#### ●ローカルテレビ局

インターネットがインフラとして定着。ニュースもネットニュースでつぶさに見られる時代となり、誰でも開設できるYouTube、サブスクリプションサービスの定着で映像情報は溢れにあふれ、新聞同様、若い世代のテレビ離れも増加していることを考えると淘汰される日も近いかも。

#### ●防衛

日本は地政学的に尖閣諸島、千島列島、台湾有事などを巡る脅威があり、安全保障環境は最悪。更に自然災害が多発・大型化し、被災者の救助活動は増えてきている。このタイミングで出生数減少スピードの加速は極めて危ういと感じざるを得ません。警察官や自衛隊員も定年が延び、シニア世代が超高齢国家の国防を余儀なくされるかも知れませんか？

少子化歯止めのために、私個人として出来ることはありませんが、どの世代の人達も日本の未来に希望を持てる明るい社会であることを祈るのみです。